
海の向こうは

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の向こうは

【Nコード】

N0382B

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

空転する愛が死を呼んで、君と彼女と僕の行きつく先は海。

背持たれを倒して、朝焼けの海を見ていた。

肌寒い風が、手動の窓から潮風を運んでくる。

目を瞑ると、一層深く潮の香りが鼻につく。

助手席のドアが空いて、彼女が外に飛び出した。

僕はチラッと横を見たが、もう其処に彼女の影はなかった。

眠るには神経が高ぶりすぎていて、体を起こすには疲れすぎていた。思考が行き着くのは君の姿で、気が付けば視界の中にいない彼女を目だけで追っていた。

海岸に漂着した沢山の美しいものも、そうでないものも全てが光っていた。

女のサンダルが転がっている。

僕は疲れてしまっていた、昨日から彼女に、かけ続けた言葉がまだポケットの中に落ち込んでいて、返事をしてくれない彼女の顔を思い出している。

ネオンの光が眩しくて、彼女の唇の動きは分からなかったけれど、そこには恐れと侮蔑と精一杯の非難の言葉が溢れていたのかもしれない。

彼女は君の妹で、君によく似て強情だ。

僕は恋人である君を殺して、君の妹を連れて海に来ている。

座席の下には、君を刺したナイフが転がっていて、もう黒い塊になった君の血が冷たくなっている。

昨日は酒を飲んでいなかった、でも何かに酔っぱらったみたいに頭

がスツキリしなかった。

何かをしながら、何かを考える事ができなくて、気付いたら君が側に倒れていた。

本当は、あの男の事なんてどうでも良かった。

ただ、君に真実を話して欲しかった。

でも、あの男の指の美しさを語る君の顔を見ると、その男が君の体に触れたということに我慢できなかった。

なぜ、君がナイフなんて持っていたのかは分からないけれど、きっとそれは君を殺すためのナイフではなかっただろう。

気が付いてから、僕が最初にしたことは、救急車を呼ぶことでも、警察を呼ぶことでもなくて、君の妹に電話をする事だった。

それから僕は、深い睡魔に襲われて君の倒れている方ではない、もう一つのベットに倒れこんだ。

扉を叩く音が、僕を現実に呼び醒ました頃には、世界は夜になっていた。

長い長い夜が始まっていて僕は、彼女を部屋の中に率いれた。

僕はできるだけ、静かに部屋の隅にいて、彼女の言葉を待った。

それは、死刑囚か最後の審判を待つ人間さながらであった。

「いつ、姉さんを殺したの？」

「正確には思い出せないんだ。何時間も前かもしれないし、ついさっきだったかもしれない。」

彼女の目は、僕の身体の向こうにある壁を見ていた。

「どういった罪も許されることはないわ。」

「うん、わかってる。」

僕は言う。

「姉は来週、結婚式を挙げる予定だったの。」

「…あの男と？あの薄汚いピアノ野郎か？」

「いいえ、違うわ。」

「そうか…、だから僕との関係を精算しようとして…だ。としても…
…いったい誰なんだ。」

「あなたの知らない『誰か』よ…」

彼女は思うように唇を動かせないというように、言いたい言葉を飲み込んだ。

「そうか…幸せだったのか？」

「そうね。少なくとも、今日よりは幾らか幸せだったと思うわ。」

そのあと、永遠とも思える沈黙が続いて、唐突に彼女は言った。

「あなたは誰かの事なんて考えなくていいのよ。あなたは姉を愛していた。」

「もちろん。」

「これからもあなたは姉を愛し続ける。」

「ああ。」

太陽は、登り始めている。助手席には君のサンダルが置いてある。君の妹が砂浜に立っているのが分かる。

僕は、静かに窓を閉めた。エンジンを点火した、海が迫ってくる。

そして、光が音もなく視界を覆いつくす。

僕は君を愛す。でも、君は僕ではない誰かを愛す。

僕は君を殺す。でも、君は僕ではない誰かを殺す。

どう違うというのだろうか、そこに明確な差があるだろうか。

海は寒くて息はそう長くは続かないけれど、今この瞬間にも僕は君を愛している。そして後悔してはいないのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0382b/>

海の向こうは

2011年1月19日13時17分発行